

## 「ふるさとづくり上高尾の会」のあゆみ

まず最初に上高尾を訪れて頂いた方々にあらためて感謝申し上げます。「ふるさとを残したい」との気持ちを原点到、そのためには来ていただけるような地域づくりが大事。利便性を優先して忘れてきた大切な事が上高尾には息づいています。自らが輝きこれを伝えていくことがとりもなおさず「ふるさとを残す」ことだと思っています。「ふるさとづくり上高尾の会」は発足以来5年に亘り「仲間づくり」、「絆づくり」、「お互いが支え合える仕組みづくり」といった《人との関わりを大事にする事》を基本理念として共有し、活動してきました。交流広場である上高尾センターで繰り広げてきた数々のイベントや、県内各所のイベントへの参加はその理念を形にする場でもありました。また、当初から「都市と農村の共存」というテーマを追い、京阪神地区の方々と取り組んできた交流イベントが核となって牽引してくれました。今では双方向の交流が軌道に乗り、これから先の「上高尾の姿」をお互いが描くまでになりました。こうした活動が地元コミュニティー再構築のエンジンになれるようこれからも続けていきたいと思っています。(事務局 谷浦)

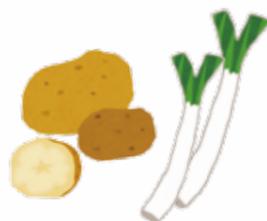
## ふるさとづくり上高尾の会 活動記録

spring

4月12日 ジャがいも・ねぎの植え付け



今年も上高尾の会はじゃがいもとねぎの植え付けからはじまりました。翌日に控えた伊賀風土FOODマーケット出品に向けて薬灰(灰汁)も一緒につくりました。



4月13日 第2回伊賀風土FOODマーケット出店



H26年3月から始まった上野市駅前広場でのフリーマーケット。こんにやくは健康志向が高まっている昨今、人気の商品ですが、若者や女性もターゲットにしており、我々の薬灰こんにやくはわらび餅の食感で独特の臭いもなく、試食したほとんどの方々が買ってくれます。前回に続き、今回も午前中に早々完売。ありがとうございます。

5月4日～5日 田植え&案山子づくり

晴天に恵まれ、サポートの会から昨年より15名も多い46名(内子供24名)集合。上高尾の会からは15名が勢ぞろい。初日は子供達は田植えと山菜採り、大人は薬灰づくり&ピザ生地づくり。二日目、子供達は案山子4体づくり、大人は薬灰こんにやくとピザを焼き、昼食会はおおいに盛り上がりしました。



6月21日～22日  
田の草取り&ホテル鑑賞会&音の報告会



サポートの会から30名、上高尾の会いつもの15名。初日は草取りの後、大阪から持参してくれた鯉をこだわって薬灰で炙ってタタキづくり。二日目は双方向の意見交換のための合同会議と昨年度作った音CDの製作者による音の報告会。合同会議では夏に予定している「大阪子供サマースクール」の内容打ち合わせをし、竹ドームづくりや竹筒ごはんなど珍しいメニューに盛り上がりました。音の報告会では、音CDの仕上がりをプロから褒められ、音収集に苦戦したメンバーの顔がほころびました。

NEW

7月14日 松阪市波瀬から  
「クレソンの会」メンバー4名来訪



サポートの会のメンバー井上啓子さんの紹介で波瀬の「クレソンの会」から4人が地域活性化に取り組む上高尾の会を見学に来られました。波瀬は「クレソン」、上高尾は「薬灰こんにやく」で地域活性化に取り組んでおり、仲間意識を共有できました。この日は2名の三重県職員の方にも同席頂き、今後の交流拡大に期待が膨らみました。

NEW

8月7日～9日  
大阪子供会サマーキャンプ

「古代人の叡智に触れる」をテーマに大阪から29名、上高尾の会14名の合計43名が参加。多人数の子供たちを受け入れるのは初めてでしたが、これまで多彩なイベントを実施してきた経験から、準備を楽しみながらできたことが一層会員の結束力を深めました。竹ドームづくりや流しソーメンなどメイン事業は実施できたが、農作業実習や古代劇、ライア演奏は台風接近で中止となり残念でした。



NEW

8月27日 飯高町波瀬を訪問

7月の波瀬「クレソンの会」からの訪問を受け、今回は上高尾の会から11人で波瀬を訪問。波瀬では上高尾の会のような有志による小さな組織ではなく、むらづくり協議会全体で少子高齢過疎化といった我々と共通の課題に取り組んでいることがわかりました。協議会長さんに村内を案内頂いたあと、波瀬むらづくり協議会メンバー10名の方々と旧波瀬小学校を活用した会議室で有意義な懇談ができました。ちよっぴり「薬灰こんにやく」を宣伝できました。



※波瀬ユリ

9月13日 稲刈り



秋晴れの中、大阪サポートの会から35名、上高尾の会から17名が参加。今回も上高尾のメンバーが早出して隅を刈込、はざかけ資材も運び込みました。いつものように、鎌で稲を刈込、はざにかけていきます。子供たちは手慣れた様子でしたがしばらくすると、バツを追いかける歓声があたり一面に響き渡りました。



NEW



11月10日 養父市(国家戦略特区)から  
区長会メンバー10名来訪

農業部門で国家戦略特区に指定されている養父市から、上高尾の会の地域活性化への取り組みについて視察。農水省の補助金を活用した「都市と農村の交流事業」や「特産品(藁灰こんにやく)づくり事業」について説明し、意見交換をしました。



NEW 10月17日 伊賀ぶらり体験博覧会参加



伊賀市が観光立市を目指し、今年から始めた事業で、着地型観光とも呼ばれ、従来型の観光会社のプランに沿った観光ではなく、地元が観光プランを企画し募集する全く新しい観光形態。上高尾の会は「幻の藁灰こんにやくに出会えます」をキャッチフレーズに参加。100を超えるエントリーがある中、応募がなく開催をあきらめるプランもありましたが、我がプランはエントリー開始するなり応募定員になりました。これに応えようとメンバー全員で誠心誠意おもてなしをしました。やり終えたあとの満足感、充実感と言うまでもありません。



11月16日 上高尾源流フェスタ

収穫祭と銘打ってはじめて秋のイベントでしたが、名前を上高尾源流フェスタに変え通算4回目になりました。今回は夏のサマーキャンプで実施できなかった子ども達による古代劇や、ライアー演奏、それに加え地元の演奏家による楽器演奏など盛りだくさんのメニューでした。地元も含め121名もの参加があり、秋の山里は猿もびっくりするような賑やかさでした。



NEW 11月22日 美味し国三重県大縁会に出店



三重県が地域交流事業として募集しているパートナーグループに参加していることから、三重県大縁会に出店しました。県内から140グループが参加し、自慢の特産品などの販売を通じて交流を深めました。午前中は人の多さにさすがの乙女シスターズも圧倒され、売れ行きが少し伸び悩みましたが、午後から本領発揮。最終的にはほぼ完売で、帰ってからの打ち上げはおおはしゃぎでした。これが後日三重テレビの取材を受けるきっかけになりました。



12月14日 伊賀風土FOODマーケット出店



顔なじみになったお店の方々や来場者の方々との話が弾み、肌寒さも忘れ、藁灰こんにやくを販売しました。常連のお客さんもでき、「美味しいの分かってる。試食はええわ」と言って買ってくれる人や、わざわざ名古屋から買いに来てくれた方もおり、今回も藁灰こんにやくは午前中に完売しました。



11月24日 京都大学学園祭で出張販売



秋紅葉真っ盛りの京都に8名で出張販売にでかけました。これで4年連続になります。今年は「藁灰こんにやく」を精力的に販売しており、ここ京大でも、上高尾に来てくれている小田ゼミの学生の販売応援を受け、早々に完売となりました。伊賀上高尾の話や藁灰こんにやくの説明に興味深く聞いて頂き、自信を深めました。昼食はいつものように小田先生の研究室で懇談しながらいただきました。小田先生次回も宜しくお願いします。

NEW 12月13日 三重テレビの番組取材



県内の元気なグループを紹介する番組「ゲンキみえ」の取材を受けました。もちろん主役は「藁灰こんにやく」です。朝9時から夕方4時までびっしり慣れないインタビューに追われ、疲れた1日でしたが、一方で充実した1日でもありました。また、都市と田舎の交流も大きなテーマであり、この日はサポートの会や京大生も来てくれて日頃の交流ムードを演出してくれました。1月11日三重テレビ「ゲンキみえ生き生きレポート」で放映されました。

NEW 2月1日 戯曲「夕鶴」観劇



サポートの会のメンバー揃い 狼星さんが主演する戯曲「夕鶴」を観劇に上高尾の会メンバー9人が大阪へ。忙しい中、1年間に亘って稽古に励まれたとの事、殆ど小道具なしで2時間続けられた演技にはとても迫力がありました。そのあと、「上高尾でのセカンドステージ」について議論し、懇親会へと続けました。

## 主要な会議

今年は他地区との交流を広げるため多様なイベントに参加しました。そのための会議もたくさん参加しました。

- 4月17日 こども農山漁村補助金事業意見交換会、事例報告会 (三重県伊勢庁舎)
- 6月26日 田舎体験安全管理研修会 (三重県伊勢庁舎)
- 7月3日 伊賀ぶら博覧会エントリー説明会 (伊賀ハイトピア)
- 10月15日 美味し国三重県大縁会三重サンアリーナ出店説明会 (三重県講堂)
- 12月21日 『美味し国おこし・三重』伊賀地域交流会 (ハーモニーフォレスト)
- 2月2日 伊賀ぶら反省会 (伊賀ハイトピア)

## 5年を経過した「ふるさとづくり」への思い

森谷 巖（ふるさとづくり上高尾の会 会長）

年月の過ぎるのも早いものでふるさとづくり上高尾の会も発足以来6年目に入ろうとしています。少子高齢化や過疎化の流れの中、仲間づくりをしようとスタートして現在18名で頑張っています。大阪のアーティスト及び京都大学農学研究科の方の協力のお蔭で又、京阪神の方々に上高尾サポートの会を立ち上げて頂き、年々交流会が広がっています。特にビザ窯が大人気でよかったです。藁灰こんにやくに取り組み多方面に参加、伊勢サンアリーナ、京都大学祭、伊賀風土フードマーケット、青山産業祭、風と土ふれあい芸術祭、など数多くに参加でき嬉しく思います。今後とも会員皆力を合わせ楽しく藁灰こんにやく、又、いろいろな面で挑戦していきたいと思います。

山口 久則

ふるさとづくり上高尾の会が発足して5年がたちました。この5年間にたくさんの行事や、活動をいろんな方々と一緒にしてきました。そこには自分でも気づかなかったふるさとの良さを、大阪の方々や子供たちの目線を通して、もう一度見直すことで、上高尾の良さを再確認できました。そして、人と人のつながりがいつも自分をあたたかい気持ちにさせてくれたことに感謝しています。

鈴井 賢司

5年前ふるさとづくり上高尾の会の発足を知り、参加申し上げ今日に至っております。私自身だいぶ老齢の身になり皆様にご迷惑をおかけしないかと思うこの頃ではありますが、会の皆様又サポートの会の皆様子供様方といろんな交流に参加しお出会いする事を楽しみにしています。当地も高齢化、人口減、子供も全くと言っていいほどいない、そんな暮らしの中で、ふるさとづくりの会の役目とってははおおげさかわかりませんが会の皆様やサポートの会の皆様といろんな協議、話し合いを行い、活気の有る郷土づくりに目標を置き、又ふるさとづくりの会の発展を目指し、今後も少しでも手助けできるよう頑張ろうと思います。

立花 隆司

ふるさとづくり上高尾の会も早や5年過ぎ、今年は軌道に乗りつつある「藁コンちゃん」を柱として各事業を成功させたいものです。会員の皆さん、又、サポートの会の方々との「和の心」を大切に1年楽しく頑張りたい思いです。

奥永 久寛

尺度にはメートル尺、曲尺、鯨尺があるように人には夫々に持ち合わせた自分の尺度がある。これが厄介者で話し合いの中でも意思疎通の妨げや誤解の素因となる事が多い。私たちの「ふるさとづくり上高尾の会」も5年間、55回の定例会議をもち、これ以外にも作業等で報告・連絡・相談を繰り返して何とかヨチヨチと今日を迎えることになっています。この間、会を代表する者、会計を司る者、企画を司る諸氏に感謝する共に「ものさし」違いからご苦勞されている事に敬意を表します。古くから「籠に乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋を作る人」とのいわれがありますが、「ふるさとづくり」のため私の甲斐性に一番似合った草鞋作りに徹して仲間の後をついてゆきたいと願っています。

上田 清志

月1回の定例会の中でそれぞれの意見を出し合い1年間の行事を決めながら5年がたちました。少しではありますが、新しい事にチャレンジし、徐々には成果も上がってきたと思います。都会の方より、「上高尾はええところやな」と自然と口に出され、ふるさとの会員も嬉しく思っています。これからも都会の方と一緒に活動を更に広げ地域の活性化に努力していきたいと思います。

岩城 國久

ふるさとづくり上高尾の会も5年目をむかえ、いろいろな事業に取り組んで頂きました。森谷会長様、谷浦事務局様には、たいへんご苦勞されたこととおもいます。当初、高尾を残したいという思いで、ふるさとづくりの会に賛同し、大阪の人たちとも合流してきました。これからも、上高尾の田畑、山、水を出来るだけ今のまま残すことができれば、と考えています。ふるさとづくり上高尾の会も農業も、京大の協力のもと高尾をどうすれば良いのか、良い方向に行くようお願いします。ふるさとづくり上高尾の会の皆様がいっまでもお元気で、高尾で住んで充実した日々を送って頂けますようお祈りいたします。

立花 京子

ふるさとづくりの会に参加して5年になります。その間、突然の主人との別れにもう会を辞めようと何度も思いました。が、上高尾の会員さん、サポートの会の皆さんの若さ、笑顔、優しさ、に元気と勇気を頂きました。もう少し一緒にして頂いて頑張りますので私の手足を引っ張って前進させてください。

森谷 幸子

「水で繋がる上流と下流」ということで大阪の方との交流が始まり、今までいろいろな行事に参加させてもらい私が感じた事は、お互いが協力し助け合える仲間がいる事、この絆がとても好きです。何か行事があるたびに「あしんどいなあ、出来るかなあ」と思う反面終われば全員が「ヤッター　パンザイ」とやれば出来るこの満足感が嬉しくて、又次のイベントにも頑張ろうと意欲が湧いてくる。この仲間に出会えた事、素直に嬉しく長く続けていけたらいいなあと思います。昨年秋に参加した伊勢のサンアリーナでのイベントは私たちも早朝から車に商品を積み込み会場に行きました。約140ブースの出展があり、来場者も2万人を超える程の賑わいで、最初は人に圧倒され恥ずかしいと思ったのも束の間、そのうちに場内の雰囲気にも慣れてきて人と人の触れ合いの中に新しい発見があり、また藁灰こんにやくも完売（売り子さんがよかったのかなあ）。自分も楽しませてもらい反省会の酒のツマミも買い込んで疲れたけれども満足した一日でした。いつも事務局の方のご指導のお蔭と、そして全員の皆様の団結力でこの会が成りつつっていると思います。これからも私の出来る範囲の事は協力し頑張りますので「乙女シスターズ」を「ずーっと」引っ張って行って下さいね。

奥永 敏子

藁灰こんにやくに出会って焼灰の黒くなった藁に熱湯をかけ、何度かこしている内に透明になり、この汁がこんにやくを固まらせる事には驚きました。芋をあくの中で浸し空気に触れないように1時間いもをすり込み置いておく。丸く手の中で型を整えて1時間沸騰させ水で冷ましたこんにやくがピンク色になり、この作業で柔らかいこんにやくが出来る事に出会いました。

山口 美喜枝

川藻に零ればかりの薄桃色の「しだれ桜」。滝壺に見え隠れする「あまご」。せせらぎにたわむ「もみじ」。水しぶぎの水がどンドン大きくなっていく「川辺」。こんな季節ごとの山あいの自然を当たり前のように気にも留めず忙しく過ごす毎日。この日常がどれほど素晴らしく幸せな事か気づかされた5年間でした。イベントごとの大阪の人達とのふれあい、楽しい会話、そして昨年の伊賀ぶらり博覧会「いがぶら」に参加してくださった方々からも、自然いっぱいの高尾の魅力に感嘆の声をたくさん頂きました。藁灰こんにやくを中心に高尾の活性化に、そして次世代に引き継げるよう微力ながら協力していきたいと思っています。

谷浦 月子

他所から嫁してきた私を癒してくれた上高尾のいちめんのすみれや秋の竜脳菊。それらへの想いを行動に移さないまま時が過ぎてしまった。昨年看板娘ならぬ、看板屋スターとしてデビューして入会。「今度いつ会えるん〜」とイベントを終えた夜には次回までの寂しさを感じる距離となり、何十年もの時間が消えていく。この自然を維持してくれた人々と、仲間との心溶ける出会いに感謝する今である。私が残し、繋げられるものに動いて行きたい。

上田 悦子

この5年間たくさんの方との出会い、上高尾オリジナルブランド商品(藁コンちゃん)の完成、一言で言えない苦勞があったことだと思います。又、様々なイベントに参加するたびにいつも（あー大変　あー大変）と言いながらも最後は笑顔に満足感。内心（やった）と思いつつ苦勞も忘れる様なそんなグループかなあとと思います。このふるさとづくり上高尾の会に一人でも仲間が増える事を願いつつ大阪の方と共に地域活性を目指していきたいです。

岩脇 佐代子

とても明るく賑やかでまた元気な「ふるさとづくり上高尾の会」に入れて頂きありがとうございます。初めは圧倒されていました、その内に溶け込んでいる私がありました。これからもよろしく願います。

田中 信子（上高尾サポートの会）

「上高尾」という大地

　子供は、大地に立つものである。

　こういう言葉を聞いたことがあります。子供の幼い足はしっかりと土のうえに立つべきもの。そして、大地とは「母性」のことである。記憶があいまいなのですが、このような意味だったと思います。

　私は二人の子供がいます。今年、中学二年生になる長男と、小学二年生になる長女です。前述の言葉を聞いた時、彼らにとっての大地はあるのだろうかと考えました。私達は大阪市内に住み、近所の道はもちろん固いアスファルトで埋め尽くされています。小さな公園はいくつもあります。当然、そこには土がありません。でも、大地と呼ぶには、あまりにもその言葉がもつ包容力がありません。残念ながら故郷と呼べるところありませんでした。

　そんなことを考えていた一昨年の五月、友人から上高尾での田植えに誘われました。あいにくその時は用事と重なっていくことができなかったのですが、去年の五月に初めて長女を連れて上高尾を訪れることができたのです。

　透明感のある、青空の日でした。大阪上本町駅から電車と車に揺られ、山奥深くふかく分け入るように行きました。

　さあ、初めての上高尾です。

　そこはもちろん、生活をしていくために道路は整備されています。でも、一步踏み入れば田が広がり、川が流れ、山があります。

　まず、水田に裸足で入って田植えを体験しました。その時の、足の裏から、くるぶしから伝わった土の感触はいまだに覚えています。温かく、柔らかく、思いの外に気持ちのいいものでした。一步、また一步と足を入れるたびに、泥の土が迎え入れてくれるようでした。娘も初めて出会った男の子と並んで、きゃっきゃっと笑いながら田植えを楽しみました。

　そして彼女が夢中になったものは他にもありました。そう、小さなカエルにカニです。田んぼでびよんびよん飛び跳ねるカエルを追いかけは両手ではっと捕まえ、川辺でカニを見つけ、小魚を見つけて……。

　そのような子供達の姿を見ていて、どうして近所の公園を大地といえないのか、その理由の一つがわかった気がしました。公園には生き物がこんなにたくさんいないのです。でも上高尾にはあちこちにカエルがいて、カニが川にいて道路を歩いていたりする。アリも大阪とはくらべものにならない程、大きい！

　六月の田んぼの雑草抜きでは、娘はほとんど草を抜きませんでした（すみません笑）。水田に泳いでいるオタマジャクシを掬うのに忙しかったのです。私もびっくりするぐらいの大きなオタマジャクシがうじゃうじゃ。子供達が喜ぶのも無理はありません。彼らに言わせると、手足のはえたオタマジャクシはケロタマと呼ぶのだそうです。ケロタマもたくさん捕まえていました。そして私も初めて、水田で無数の小さな卵を背負ったコオイムシを見たりしました。

　雑草抜きの夜のホタル観賞も素敵でした。ホタルの光は儚いようで生命力を感じさせます。地元の男性の方が捕まえては子供達に渡してくれました。小さな掌のなかで光るホタルに私達は見とれたものです。その行き帰りにはトラックに乗せてもらい、荷台で受けた夜風が気持ち良かったです。

　九月、娘達はほとんど稲を刈らずにカエルやバッタに夢中（すみませんでした笑）。私は稲刈りに挑戦しました。地元の方々に教えてもらい、なんとか刈っていきます。一番驚いたのは、刈るために稲を束にして片手で引っ張るたびに、根元から多くのバッタが飛び出して逃げていく光景でした。人間が植えた稲の間でバッタやカエルが暮らしている。こんなことは上高尾の方々には何でもないことでしょうか、共存しているというか、小さな生き物も人間も等しく同じ存在なんだということが感じられました。

　大げさかもしれませんが、私は、娘がカエルやカニ、バッタなどいろんな生き物に触れて、自分と違う生命あるもの、ヒトと異なるものを受け入れる多様性を身につけてほしいと思うのです。ここまで生物のことばかり書きましたが、私が上高尾に魅かれる理由は他にもたくさんあります。その中で一番心魅かれるのはなんといっても、地元の方々の温かさです。初めて訪れた時から、大阪からやってきた名前もなにもわからない私達母娘に屈託なく話しかけてくれ笑顔をむけてくれた方々。田植えや稲刈りなどいろんなことを親切に教えてくださる男性の方々。山菜の天ぷらや炊き込みご飯など大人数の食事を明るい笑顔でつくってくださる女性の方々。みなさんの笑い声のなかに身を置くとほっとする自分がいま。もしかしたら、これが私にとっての大地なのかもしれません。

　十一月の収穫祭ではみんなで育てた新米をいただき、楽しいひと時を過ごすことができました。

　自然と地元の方々の温かいお人柄と。願うことなら私の娘が成長して子を産み、その子を連れてまた、この土地の土を踏める日がやってきますように。上高尾がいっまでも私達の大地であってほしいと思います。そして、これは私の勝手な思いですが、世の中の恵まれない子供達にもぜひ上高尾の大地に立ってもらい、自然に包まれる機会があればなあと思うのです。例えば、貧困家庭に育つ子供や、親と一緒に暮らすことのできない子供達など……。

　最後に、上高尾を訪れる機会をつくってくださった大阪のサポート会の皆様には大変感謝しております。ありがとうございます。そしてこれからもよろしく願います。

小林 稜（上高尾サポートの会　高校1年生）

私は、小学校4年生の頃から空堀ことば塾を通じて上高尾との交流に参加させていただいていますが、昨年の7月を境に私の中での私個人と上高尾との関わり方や、その位置づけが大きく変わりました。初めてことば塾を通じてイベントに参加するという形ではなく、丸尾さんや伊藤さん、浅野さん、中森さん、埴先生などの有志の方々が田畑を借りて自分たちで米を作っている活動に、途中からではありましたが参加させていただいたからです。この話を最初に聞いたときは、なんとなく手伝おうかなというような感覚で参加を決めましたが、行って作業をしてみて、その甘い考えが吹き飛びました。それは想像した以上に厳しい作業で、それに取り組む有志の方々の姿勢も、自分とは比べ物にならないほど真剣だったからです。少し飛躍するかもしれませんが、昨年この活動に参加して自分が成長したと思うことがあります。それは「考える」ということができるようになってきたということです。これまでの私は、何か行動をするときにそれについて「考えて」行動していた、つもりでした。でも実際にはそれは「考えたつもり」だっただけで、きちんと「考え」ればしないうなことをして失敗するということがありました。しかし、この有志の活動にはじめて参加させていただいたとき、それを見つめ直すことになりました。貴重な休日を使って大阪などから農作業をしに来ている方々を見て、この活動に参加してみるかどうかを考えたつもりになって、なんとなく手伝うつもりできた自分は一体なんだろうと思うようになり、以後物事を考えて実行するということを意識するようになりました。それ以降、私はこの活動だけでなく上高尾との交流イベントにも今までより積極的に参加させていただいています。先に書いた有志の方々と同じかどうかはわかりませんが、農業やそういったことを上高尾まで出かけてする意味を自分なりに見出すことができたからです。私が上高尾に行ってやっている活動は、上高尾の活性化や自分達の食に対する意識の向上に繋がると考えています。上高尾のような過疎化が進む農村の活性化、つまり農村人口の増加はとても意味のあることではないでしょうか。その理由は、農村の人口が増えないと農業人口が減ってしまったり、都市に人口が集まりすぎたままの状態になってしまうといったことが起きるからです。農業人口が減ると食料自給率が今よりも落ち込み、また日本人が「食の実感」を失っていくといったことが起きるのではないのでしょうか。まず食糧自給率についてですが、そもその問題として食糧自給率の落ち込みというのは悪いことなのでしょうか。日本のように食糧自給率が低い国、自国であまり食料を作らない国というのは、自国で作るよりも安い他国の食料を輸入しています。私達がそんな安い輸入食料品を手に入れられるのは、それらが他国の安い労働力によって作られたものだからです。劣悪な環境で低い賃金しかもらえない人たちが私達の何不自由ない食卓を支えている。こんなことがいつまで続くのでしょうか、続いたとしてもそんな状況が許されているのでしょうか、良い訳がありません。輸入食料に頼る、すなわち食料自給率が低いことの弊害は、一般的に言われているものが他にもたくさんありますが、この事も問題を解決しなければならない重要な理由のひとつだと思います。ではもう一つの「食の実感」が無くなるというのはどういうことでしょうか。それは日本人が食料を作らなくなるにつれて「食」を軽視しているということです。食べ物を粗末に扱ったり、好き嫌いで食事を残したり、といったことが易々とできてしまうのは、「食の実感」が薄れているからではないのでしょうか。一度も自分で食料を作ったことがないから「食の実感」が薄れる、無くなるといったことになるのではないのでしょうか。農業人口が減り、食料を作ったことのある人が減ってしまうと、そんな「食の実感」が薄れた、あるいは無くなった人が増えていくことでしょう。なら自分はどうか。とにかく作ることに関わってみよう…。こういった意義を自分なりに見出せたからこそ、私は上高尾での活動に積極的に携わるようになりました。今まで上高尾での活動に参加する自分なりの意義を長々と語らせていただきましたが、実はそんな意義よりも大切な、参加する理由が私にはあります。楽しいから、嬉しいから参加しているんです。農作業をしていると、自分が食べ物を作っていると考えるだけで楽しくなりまし、草刈機を上手に使えるようになったことも嬉しいです。イベント等で自分が作ったものを食べて他の人が喜んでくださっているのを見ていると本当に嬉しくなります。こういった楽しさや嬉しさは誰にでも感じる事ができるものだと思います。上高尾はそんな楽しさや嬉しさを十分に感じる事ができる場所です。それを生かして人が集まるようにするには、きっかけ、そして繰り返し来ようと思える手軽さが必要だと思います。未熟者が偉そうなことを申し上げましたが、どうか温かい心で読んでいただければ幸いです。上高尾の方々とそれに関わる全ての皆様、これからもどうぞよろしく願います。

小林 康志 (伊賀市観光戦略課長)

「一期一会からの出発」

上高尾と私の関係は、偶然の出会いから始まった。平成21年度に私の所属する伊賀市農林振興課は国の支援を得て過疎化対策のモデル事業を開始しようとしていた。その際、事業アドバイザーを京都大学農学研究科の小田滋晃先生にお願いし、モデル地区にふさわしい場所を選定しようと市内各地の農村部を歩いていた。上高尾地区を歩いていたところ、小田先生が手入れの行き届いた農道や水路を見て、「この農村風景はすばらしい」と高く評価された。そこで「誰か地域の話聞ける人がいないか」と村内を見渡すと、炭小屋から煙が立っており、人の気配がしたので近づいてみると、そこにいたのが、現ふるさとづくり上高尾の会事務局長の谷浦さんであった。我々は谷浦さんの炭焼き小屋で地域の状況を聞き取った。そこで感じたことは、淀川下流域である関西地区との交流による地域活性化の可能性であった。小田先生は即座に、「地域の活性化は、異分野の交流が有効であり、上高尾地区は現代アーティストと交流すべきではないか」と示唆された。この偶然の出会いから「ふるさとづくり上高尾の会」が設立され、現在、「藁灰こんにゃく作り」や関西圏都市住民との盛んな交流事業が行われており大変うれしく思っているが、これらの成果は、一期一会を大切にしている上高尾の人々の美風から生じるものであろうとも感じている。

小田 滋晃 (京都大学大学院農学研究科 教授)

私が上高尾で谷浦さんと関わりを持つようになったのは、「たまたま」であり「偶然」でした。上高尾の活性化について伊賀市役所的小林康志さんから相談を受け、上高尾に初めて視察に訪れた時、この「たまたま」がありました。小林さんをはじめ伊賀市の方々と「こういうところで炭焼きがあったらいいですね」というお話をしながら歩いていたちょうどその時、「ここに炭焼きをされておられる方がおられる」という伊賀市の方のご指摘で、それではとすぐさまその炭焼き小屋をお尋ねしたところ、偶然にも谷浦さんがおられたという次第です。全ての始まりは、この時の

「たまたま」からです。すでに上高尾での取り組みは5年を経過して、大阪を中心とした人的交流事業、京大での出張販売、六次産業化の認定を受けて藁灰こんにゃくを生産・販売するなど活動が非常に活発になってきています。京大での出張販売の時には、上高尾のみなさんの元気を拝見することができ、大変嬉しく思っております。また、研究室の学生が毎年お世話になっており、今も変わらずお付き合いくださっていることに、本当に感謝しております。これからも上高尾における活動が、「たまたま」や「偶然」による偶然的要素による影響を受けながら、さらに発展していくことを祈念しております。

上西 良廣 (京都大学大学院生)

「今までの活動の振り返りとこれから」

上高尾の活動に初めて参加してから、早くも五年が経過しました。初めて参加した活動は田植えでした。生まれて初めての農作業で、大自然に囲まれながら、稲を手植えたのを今でもはっきりと覚えています。それ以降も、活動に時々参加させていただいて、ふるさとづくり上高尾の会(以下、「会」)の人々と交流させていただきました。上高尾に行き始めてから二年目のとき、上高尾の家の縁側で、何気ない会話をしていると、京大の学園祭での出張販売の話が持ち上がりました。その後、実現に至り、京大での出張販売の回数は、既に4回を数えるわけですが、あの時の会話から始まったんだと思うと、感慨深いです。販売当日は、会の人々の販売スキルが毎年向上していることには、驚かされています。さらに、活動内容も年々高度になっています。今までは米や野菜などの一次産品を生産・販売するという活動が中心でしたが、藁灰こんにゃくの生産が実現し、生産・加工・販売を行うことができるような環境が整いました。いわゆる「六次産業化」が実現しました。このことは、活動の目的である定住者を確保するということが、大きく前進するきっかけになると思います。活動の時には、元気いっぱいのみなさんから元気をもらってばかりですが、これからも一緒に活動をさせていただきたいと思いますので、よろしくお祈りします！

# ふるさとづくり 上高尾の会

【上高尾ニュースレター2014】

特集 5年を経過した「ふるさとづくり」への思い



- あゆみ
- 活動記録
- 「ふるさとづくり」への思い
- あとがき



## 水+大地+ココロ=つながる距離

ふるさとづくり上高尾の会は、顔の見える『つながる』ことのできる関係を淀川流域で作っていきたくと考えています。



## あとがき

「ふるさとづくり上高尾の会」では5年に亘る京阪神地区住民との交流を通じ、沢山の新しい発見がありました。長い間置いてきた忘れ物に出会った思いです。これから先、この忘れ物を大事に次世代につなげていけるよう、その土台づくりの物語を紡いでいこうと思います。そのためにも地元の皆さんをはじめ、関係先の方々のご支援、ご協力が不可欠です。今までのご支援、ご協力に感謝すると共に、今後とも一層のご声援を賜りますようお願い致します。

## ふるさとづくり上高尾の会 上高尾ニュースレター vol.5

発行日 平成27年3月

発行 ふるさとづくり上高尾の会

企画 谷浦 清孝(ふるさとづくり上高尾の会 事務局)

〒518-0216 三重県伊賀市高尾4503

[Blog] <http://blogs.yahoo.co.jp/kamitakao> [E-mail] [furusato@asint.jp](mailto:furusato@asint.jp)

※本冊子は「子ども農山漁村ふるさと体験受入モデル体制整備支援交付金」を活用し制作しています。

